

第一部 完璧な装甲の強制解除

限界のヒールと甘い引力

23時30分。

港区六本木のタワーマンション、32階。

指紋認証の重厚なゲートを抜け、自室の重い扉を閉めた瞬間、耳の奥でキーンという甲高い耳鳴りが鳴り響いた。

数千億円規模の命運を分けるコンペティション。

一秒たりとも気の抜けない、ヒリヒリとした戦場のような一日を終え、私の脳は文字通り焼き切れそうになっていた。

ガンガンと鈍い痛みを訴える頭蓋骨を、なんとか首の皮一枚で支えているような感覚。ブルーライトに灼かれ続けた網膜は熱を持ち、視界の端がチカチカと明滅を繰り返している。

それでも私は、無意識に背筋をピンと伸ばした。

完璧な『一ノ瀬英里菜』でなければならぬ。

誰に強制されたわけでもない、私自身に課した絶対的な鉄の規律。

年収一千五百万円。

額面上は成功者と呼ばれる部類に入っても、その大半はこの『完璧な機体』を維持するためのメンテナンス費に消えていく。

シミひとつない陶器のような肌も、ミリ単位で計算されたヘアスタイルも、すべては他者に付け入る隙を与えないための武装だ。

特に、この7センチのピンヒールは、男ばかりの役員会議で視座の高さを保ち、彼らを論理でねじ伏せるための私の最大の武器だった。

今日という日を戦い抜いたそのアーマーを纏ったまま、私は玄関の冷たい大理石の上で深く、浅い呼吸を繰り返した。

早く靴を脱いで、メイクを落として、明日の資料の最終確認をして、明朝のワークアウトの準備を……。

次々とタスクを並べ立てる脳のロジックとは裏腹に、ふくらはぎから爪先にかけては完全に痺れきっており、一步を踏み出すことすらできなかった。

ふらり、と身体が傾く。

冷たい床に倒れ込む。そう覚悟してきつく目を閉じた私の身体を、分厚くて熱い胸板が、ふわりと背後から受け止めた。

「おかえり、英里菜。今日も世界で一番完璧で……可哀想な僕のお姫様」

頭上から降ってきたのは、ひどく甘く、鼓膜を直接撫で回すような低音だった。

彼だ。私の恋人であり、張り詰めた私のすべてを肯定してくれる絶対的な存在、たーくん。

182センチの大きな体躯が、ヒールを履いてなお彼を見上げる形になる私の体重を、いともたやすく、軽々と支えきっている。

いつもなら「大丈夫、自分で立てるから」と強がるはずの口が、極度の疲労のせいで上手く動かなかった。

「靴、脱がなきゃ……っ」

掠れた声で呟き、私は震える指先を自分の足元へ伸ばそうとした。

しかし、極度の緊張状態から解放されつつある指先は痙攣したように微かに震え、ヒールの留め具に触れることすらできない。

もどかしさと、自分の肉体すら完全にコントロールできない苛立ちで、視界がじんわりと滲んだ。

「しーっ……動かなくていいよ。君の綺麗な指先を、これ以上すり減らす必要なんてない」

彼は私を片腕でしっかりと抱き留めたまま、ゆっくりと玄関の大理石に跪いた。
私の足元に傳くような、ひどく恭しい姿勢。

彼の大きな手のひらが、薄いストッキング越しに私の浮腫んだふくらはぎを包み込む。

男たちに舐められないため、一切の隙を見せないために毎晩マッサージを強いて維持している私の脚。

過緊張でパンパンに張り詰めたその筋肉を、彼は労るように、慈しむように、ゆっくりと撫で上げた。

ただそれだけで、凍りついていた神経がじわりと溶かされていくような錯覚に陥る。

「こんな残酷な靴に、一日中君の体を押し込めていたんだね。……痛かっただろう」

彼の手が、私の足首を優しく、絶対に逃がさない強さでホールドする。

そして、まるで私の足に食い込んだ社会という名の呪いの鎖を引きちぎるかのように、7センチのピンヒールを、ゆっくりと、しかし有無を言わさぬ力強さで『剥ぎ取った』。

カッン、と大理石にヒールが転がる無機質な音が響く。

つま先立ちを強いられていた足裏が、ぺたりと平らな床に触れた瞬間。
視界が、ぐんと下がった。

それは物理的な高さだけではない。

社会という戦場で私が纏っていた『一ノ瀬英里菜の社会的地位』そのものが、彼の足元へと音を立てて崩れ落ちた瞬間だった。

「あ……っ」

情けない吐息が漏れる。

ヒールという最後の支えを失い、私の身体は完全に重力に負けて、彼にもたれかかるようにして崩れ落ちた。

すかさず彼が力強い両腕で私の腰を抱き止め、甘く、深い抱擁のなかに私をすっぽりと閉じ込める。

彼の首筋から漂う、重くて甘い、彼専用の香水の匂い。

それが私の鼻腔をくすぐり、肺の奥深くまで侵入してくると、さっきまでずっと鳴り止まなかった耳鳴りが、嘘のようにスツと遠のいていった。

市販の鎮痛剤を何錠飲み込んでも消えなかった痛みが、彼の匂いと体温だけで麻痺していく。

「よく頑張ったね、えらい子だ。でも……もう、なんにも考えなくていい」

耳たぶを甘く食まれ、ひどく熱い吐息とともに囁かれたその一言。

ピキリ、と。

私の中でギリギリまで張り詰めていた鋼鉄の糸が、限界を迎えて、ぷつりと音を立てて切断された。

明日のコンペのことも、数千億という数字も、クライアントの顔も、すべてが白い靄の向こう側へと溶けて消えていく。

ロジックで武装した完璧な私は、今、ただ彼の胸の中で呼吸するだけの無力な女に成り下がった。

ただ、彼に抱きしめられているこの圧倒的な熱と匂いだけが、私の世界のすべてに塗り替わっていくのを感じていた。

装甲の強制解除

ヒールを奪われ、彼の大きな体にすっぽりと包み込まれたまま、私はリビングへと運ばれた。彼に腰を抱かれ、自分ではほとんど足に力を入れていない、引きずるような足取り。

間接照明だけが点された薄暗いリビングの中心には、大きな特注のソファが鎮座している。彼は私を壊れ物でも扱うようにそつと、そのソファへと下ろした。

ふかふかのクッションにお尻が触れた瞬間、体の芯から泥のように溶けて沈み込みそうになる。

けれど、私は弾かれたように反射的に立ち上がった。

「……上着、脱がなきゃ」

掠れた声を出して、自分の肩に手を伸ばす。

今日着ているのは、イタリア製のハイブランドのスーツだ。絶対にシワにしてはいけない。すぐにハンガーにかけて、明日の朝一番でコンシェルジュにクリーニングの手配を頼まなければ。

脳内にこびりついた『完璧なコンサルタントとしてのルーティン』が、悲鳴を上げる身体を無理やり動かそうとする。

しかし、震える指先がジャケットのボタンに触れるよりも早く、彼の手が私の手首をふわりと掴んだ。

「自分で、やるから……っ」

私の口から出たのは、懇願にも似た微弱な抵抗の声だった。

ダメだ。自分の管理は自分で完璧にこなさなければ。

服を脱がせてもらうなんて、そんな甘えを許してしまったら、一ノ瀬英里菜という存在の輪郭が崩れてしまう。

それは、自分のすべてを彼に明け渡してしまうという、本能的な恐怖だった。

しかし彼は、力任せに私の手を払いのけるような暴力的な真似はしなかった。

「……ほら、肩にすぐく力が入ってる。大丈夫、ただ立っているだけでいいから。全部、僕に任せて」

私が抵抗しようとする両手を、彼は少しだけ低い温度の、けれどとても大きな両手でそっと包み込んだ。

それは圧倒的な力による『制圧』ではなく、暴れる子供をあやすような、絶対的な『鎮静』だった。

182センチの逞しい体躯が、私を覆い隠すように目の前に立つ。

見上げる形になった彼の瞳は、暗い熱を帯びていて、それでいてひどく優しかった。

その底なしの慈愛に見つめられた瞬間、私の中で必死に抵抗を試みていた『有能な社会人としての自我』が、あっけなく白旗を上げるのを感じた。

勝てるわけがない。

こんなにも私を甘やかそうとする引力に、限界まで摩耗したこの体が抗えるはずがなかった。

脱力した私の両腕が、だらりと体の横に落ちる。

それを見た彼は満足げに微笑むと、私の首元に手を伸ばし、ジャケットの襟を優しく掴んだ。そのまま背中から滑らせるようにして、ゆっくりと、私の社会的な装甲を剥がしていく。

肩からジャケットの重みが消えた瞬間、自分でも驚くほど深い、安堵の溜息が漏れた。

有能で、完璧で、隙のない女。

そんな堅苦しい鎧を、彼はいつも簡単に脱がせてしまう。

「いい子だね。……さあ、ゆっくり休もう」

ジャケットを傍らの椅子に放り投げた彼は、再び私の肩を抱き、今度こそ深く、私をソファのクッションへと沈み込ませた。

スプリングが軋み、私の身体が完全に柔らかな布地に預けられる。

後頭部がクッションに沈み、視界の天井がぐると回った。

自分の身体が、もう自分の意思では一ミリも動かせない肉の塊になったような感覚。それは強烈な敗北感であると同時に、これ以上ないほどの絶対的な安らぎでもあった。

ぼんやりと霞む視界の中で、彼が私の上に覆い被さるようにして顔を近づけてくる。

ジーツ……。

静かなリビングに、微かな音が響いた。

彼の手が、私のタイトスカートの背中側にあるジッパ―を、ゆつくりと、下まで引き下ろす音だった。

その音は、私の理性の最後の防壁がこじ開けられる音のように、やけに鮮明に、溶けかけた脳の奥底にまで響き渡った。

完璧なケアとノイズの遮断

背中のジッパ―が一番下まで降ろされ、身体を締め付けていたタイトスカートの拘束がふわりと緩む。

露出した腰のあたりに、彼の手のひらの分厚い熱がじんわりと伝わってきた。

私はソファにうつ伏せに近い体勢で沈み込んだまま、抗うことすらできずに短く息を吐いた。

「いい子だ。そのまま、力を抜いて」

低く甘い声が頭上から降り注ぐ。

彼は私の足元に移動すると、ストッキング越しに、限界まで酷使された私の両脚を包み込んだ。

七センチのピンヒールに一日中押し込められ、血流が滞り、鉛のように重くなったふくらはぎ。

彼の手は、その凝り固まった筋肉を解きほぐすように、絶妙な力加減でマッサージを始めた。

「んっ……」

足首から膝裏へ。

そして、冷え切ったつま先から土踏まずへ。

的確にツボを押し、滞っていた血流を強制的に心臓へと押し戻していく。

プロの整体師すら凌駕するようなその心地よさに、思わずだらしのない声が漏れそうになるのを、私は必死に唇を噛んで堪えた。

男たちばかりの会議室で舐められないため。

少しでも気を抜けば「女だから」と見下される世界で、完璧な一ノ瀬英里菜で在り続けるため。

毎晩、涙が出るほど痛いセルフマッサージを自分に強いて維持してきたこの脚を、彼はただひたすらに、慈しむように撫で上げている。

「こんなに冷たくなって……。君の身体は、君が思っている以上に悲鳴を上げているよ」

彼の指先が動くたびに、強張っていた筋肉がとろとろに溶かされていく。

足先から伝わる圧倒的な快樂と安堵感が、私の理性という名のダムを少しずつ決壊させていくのがわかった。

ダメだ。これ以上甘やかされたら、本当に戻れなくなる。

明日も朝一番で、数千億のプロジェクトの進捗会議があるのだ。

完璧な資料を用意して、完璧な笑顔で、完璧なプレゼンをしなければ。

薄れゆく意識の中で、必死に自分を奮い立たせようとしたその時だった。

ブブブ、ブブブツ。

ソファの脇に放り出されていた私のブランド物のバッグの中で、スマートフォンが短いバイブレーションを響かせた。

その無機質な振動音を聞いた瞬間、私の身体はビクンと大きく跳ねた。

溶けかけていた脳内に、バケツで氷水をぶちまけられたような強烈な覚醒が走る。

深夜の、この時間の通知。

それは、クライアントからの緊急のトラブル報告か、海外チームからの至急の確認事項か。どちらにせよ、今すぐ対応しなければ私のキャリアに致命的な傷がつく。

「あ……スマホ……っ」

私は弾かれたように上半身を起こそうとした。

しかし、彼の手が私のふくらはぎを優しく、けれど絶対に逃がさない力で押さえ込んでいる。

ブブブ、ブブブッ。

通知音は鳴り止まない。

バッグの中で震えているはずなのに、なぜか私の右太もものあたりが、幻覚のようにブルブルと痙攣しているように感じた。

常にスマホからの通知に怯え、即座に返信しなければならないという強迫観念が引き起こす、極度のスマホ症候群。

鳴っていない時でさえ幻の振動を感じるのに、今、実際にそれが鳴っている。

出なければ。確認しなければ。私が、私がやらないと。

すべてが崩れてしまう。

パニックになりかけた私の視界の端で、彼が静かに手を伸ばし、バッグの中から私の最新型のスマートフォンを取り出した。

「たーくん、ダメ……！……見せて、仕事の連絡かもしれないの！」

血の気を失った顔で懇願する私を、彼はまるで駄々をこねる子供を見るような、底なしに優しい瞳で見つめ返した。

「ああ、これ？……大丈夫だよ、英里菜。なんの心配もない」

彼は私のスマホの画面をチラリと一瞥すると、まるで明日の天気の話でもするような、平坦で穏やかな声で告げた。

「明日の午前中に入っていたクライアントとの定例会議、僕が君の端末から、リスケジュールの連絡を入れておいたから。その返信が来ただけだよ」

「…………え？」

自分の耳を疑った。

思考が一瞬、完全に停止した。

「りすけ……………あなたが、勝手に…………？」

「そうだよ。君の文体を真似て、体調不良で数日休ませていただくという旨のメールを送信しておいた。君のチームのサブリーダーにも、必要な引き継ぎ事項はすべて共有済みだ。君が明日、無理をしてあの戦場に行かなくてもいいようにね」

私の生活基盤、そして社会的信用を担保するための唯一のインターフェースであるスマートフォン。

そのパスコードすら、彼はいつの間にか完璧に把握し、私の世界を完全に掌握していたのだ。

「そんな…………勝手なことを…………！」

怒るべきだった。

私の数年間の血と汗と涙の結晶であるキャリアを、恋人とはいえ他人が勝手に操作したのだ。激怒して、スマホを奪い返し、今すぐ訂正の連絡を入れなければならない。

それなのに。

私の脳裏に真っ先に浮かんだのは、怒りでも焦りでもなかった。

『明日、あの戦場に行かなくてもいい』

その事実がもたらす、致死量に等しいほどの、圧倒的な安堵感だった。

張り詰めていた糸が、本当に、跡形もなく消え去った。

私がすべてを背負い、私がすべてを決定し、私がすべての責任を負わなければならないという強迫観念。

それを、彼は勝手に奪い取り、勝手に私に『逃げ道』を用意してくれたのだ。

怒りよりも先に、両目からポロポロと大粒の涙が溢れ出した。
声にならない嗚咽が漏れる。

こんなの、卑怯だ。

極限まで追い詰められていた私に、こんな完璧な退路を用意されたら、もう抗えるわけがない。

私の心の最後の防壁が、音を立てて粉碎されていく。

「可哀想な僕の英里菜。こんな小さな機械からの通知に、ずっと怯えて生きてきたんだね」

彼は泣き崩れる私の頭を優しく撫でながら、もう片方の手で持っていたスマートフォンの電源ボタンを長押しした。

画面に表示された電源オフのインターフェースを、彼の長い指が躊躇いなくスワイプする。

「君の頭をいじめる悪いノイズは、僕が全部壊してあげる」

プツリ、と。

私の社会との唯一の繋がりであつた黒い画面が、完全に沈黙した。

その真つ暗な画面は、一ノ瀬英里菜という有能なコンサルタントの死を意味していた。でも、不思議と恐怖はなかった。

代わりにあるのは、彼が与えてくれる絶対的な庇護の甘さだけ。

「さあ、これで君を邪魔するものは何もない。……僕だけを見て、英里菜」

彼がスマホを絨毯の上に放り投げ、再び私の上に覆い被さってくる。

私はもう抵抗する気力すら失い、ただ彼が与えてくれる圧倒的な安堵感の濁流に、自ら身を委ねていた。